

報告書刊行にあたって

国際常民文化研究機構運営委員長
神奈川大学日本常民文化研究所長
佐野 賢治

日本常民文化研究所は、1921年澁澤敬三が創設して以来、漁業制度史、民具研究を主な柱にして調査研究を重ねてきました。その実績が評価され2009年8月、文部科学省「人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業」で本研究所が拠点となり「国際常民文化研究機構」が認定され、設立の運びとなりました。

国際常民文化研究機構の目的は、第一に、日本常民文化研究所と、21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」（2003～7年度）の後継組織である研究所付置の非文字資料研究センターの所蔵する史・資料とデータベースを、研究者コミュニティに公開・共有化し、さらに研究分野を拡大、深化させること、第二は、「常民」、普通の人々の暮らしを研究の対象とする学問の課題や方法の多様化に伴い、その研究も拡散傾向にある中で、常民文化研究に関わる私学および国公立大学・研究機関の共同研究拠点としての役割を果たすこと、第三には、これらの活動を人文・社会科学の学問的成果として社会に発信、還元することです。以上の取り組みを通して、世界に共通する概念として「常民」の生活文化を対象とする分析視角や方法を検討し、多文化共生社会といわれる現代社会に対し、異文化理解の必要性の具体的な提示を行うことにより、学術方面から社会への貢献を図ることを目標としています。

そのために、具体的には、5つの研究分野、①海域・海民史の総合的研究 ②民具資料の文化資源化 ③非文字資料（画像・身体技法・景観）の体系化 ④映像資料の文化資源化 ⑤常民文化資料共有化システムの開発、を設定し、研究テーマを公募しプロジェクト型共同研究を進めることにしました。初年度は、プロジェクト全体、また各研究グループの方向付けの模索にあてられました。その中で、第一回国際シンポジウムの共通テーマを、「海域・海民史からみた人類文化」とし、地球面積の7割を占める海域とそこに関わる人々、海民の生活文化に焦点をあて、人間と自然とのこれまでの相互関係を検証し、この21世紀、共に地球に生きる方途を考える機会にしようと考え、年度末2010年3月27、28日の両日に開催しました。本書はその報告内容で構成されています。

現代社会は、ヒト・モノ・カネ・情報が国境などの領域を越えて移動、行き来するグローバルゼーションの時代だといわれます。日本の寿司が世界中で好まれるなど、最もローカル性を帯びる発酵食品の一つ寿司もグローバル化する一方、魚食志向が漁場や漁獲量など海洋資源の権益をめぐる国際的な争いの一因ともなっています。鯨・イルカ猟をめぐる国際的な論争はニュース種として枚挙のいとまがないほどです。

日本常民文化研究所は早くに、『土佐捕鯨史』（1943）などを刊行し、鯨研究の嚆矢を開いた伝統を有していますが、今日、世界的に賛否両論渦巻く捕鯨問題を考えるにあたり、海の常民、海民の生業・生活を通し人類文化の観点からそれぞれの立場の研究者にそれぞれ見解を披露してもらい、さまざまな視角からの学術的判断材料を提供できればと考えました。また、宮本常一・網野善彦・河岡武春らにより精力的に進められた海から見た常民文化論のさらなる展開、1997年国際シンポジウムとして開催された第1回常民文化研究講座、「海民文化と漁業」で提起された課題に応えることにもなるということで、第一日目は、「漂うクジラー“ヒト”・“カミ”・“自

然”共生の試金石」と題し、C.W.ニコル、秋道智彌の両氏を基調講演者に迎え、ノルウェーのアルネ・ビョルグ、チリのルイス・パステネ両氏を含む、江上幹幸・荒野泰典・児矢野マリ、5名の研究者に発表してもらい、その発言を踏まえ、小松正之、安室知両氏の司会・進行の下で質疑応答が行なわれました。

第二日目は、「海民社会と漁業－東アジア世界から－」の共通テーマのもと、国や民族を超えた海民文化論として東アジア地域を事例に個別的な発表が行われました。午前中は、「捕鯨と地域社会」と題し、日本各地の捕鯨の歴史と民俗が、小島孝夫・田島佳也両氏の司会・進行のもと、児島恭子、中園成生、櫻井敬人、田上繁の4氏の報告、昼食時間をはさみ、午後は「海域・海民史への展望」と題し、「海域・海民史の総合的研究」分野の3つの研究グループ、①漁場利用の比較研究 ②日本列島周辺海域における水産史に関する総合的研究 ③環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究、の各リーダー、伊藤康宏、田和正孝、後藤明の三氏から各グループの研究目標と視角が具体例と共に紹介されました。休憩をはさんで、海外の学術提携機関、共同研究者の報告が、韓国、釜慶大学校・李根雨、済州大学校・高光敏、中国、上海海洋大学・韓興勇の三氏により行われ、会場の参加者との質疑応答、田島佳也氏の全体総括で二日間にわたる全日程が終了しました。

ともかくも、国際常民文化研究機構としては初めての国際シンポジウムの開催であり、行き届かない点が多々あったと思われませんが、三百数十名の参加者が集い、アンケートには、捕鯨問題をはじめ、現在の漁村・漁業を多面的から考える良い機会になったとの意見が多く寄せられ、主催者側としてはその目的の一端が果たせたとほっと一安心しました。ただ一つ残念であったことは、当初発表が予定されていた、アメリカ、ニューベッドフォード捕鯨博物館のシュアート・フランク氏が都合により出席できなくなったことでした。

私自身個人的には、漁村・漁業よりも農村・農業問題に関心を持って調査・研究してきましたが、長年通い続ける山形県の米沢地方に特徴的に分布する草木塔のこと、日本人が食前にいのちを「いただきます」ということなどを思い浮かべながらクジラ供養の話など、各発表者の講演に自身の体験を重ねながら耳を傾けました。世界各地の常民文化には、それぞれの暮らしから導かれた自然観、生命観があり、それぞれの多様性を尊重しながら、人類文化としての共通性を志向する必要性など、生きとし生きるものすべてに仏性を認める草木供養の背景をなす仏教の本覚論との関係などを想起していました。

今、現在モロッコで開催されているIWC（国際捕鯨委員会）総会が開会後ただちに休会を宣言したように、捕鯨・反捕鯨の議論の場において感情論も行われているとのニュース報道に接する機会も多い中、今回のシンポジウムの内容が、海民が自然との対応の中で培った生活の“知恵”と近代的科学“知識”の知の融合の在り方の一端を示すことになり、新たな人と自然との共生の道が開かれる糸口に連なることを願うものです。そうでなければ、人類は、ホモ・サピエンス、知恵ある人の言葉を返上しなければならないといえます。

最後に、今回のシンポジウムの趣旨に賛同し、後援していただいた、日本学術会議はじめ、地方史研究協議会・日本文化人類学会・日本民具学会・日本民俗学会に謝意を表するとともに、神奈川大学当局による全般的支援に対し、感謝の意をこの場を借りて表したいと思えます。

2010年12月8日